日本のNo.1は世界

町の鍛冶屋からの出発

「100周年とはいいますが、お客様に支えられて自然と100年が経ってしまった感じなんです」。株式会社小出ロール鐵工所代表取締役・小出明治は、「嬉しいけれど、いささかお恥ずかしい」と語る。

大正3年6月、東京市本所緑町で明治の曽祖父・源次郎が工場を開いた。間口2間、奥行き6間の自宅を改築した“町の鍛冶屋”のようなこの鉄工所から、小出ロール鐵工所の歴史はスタートした。削りものに卓越した技術を持つ源次郎は、客からの値引き要請を断り切れない好人物でもあった。

関東大震災で工場は壊滅したが、これを機に江東区大島で小出鉄工所を創立、再出発を果たす。

昭和に入っての世界恐慌の嵐は小出鉄工所をも翻弄した。閉鎖に追い込まれようとする危機を、「お客様がいるのに商売を続けられないのは、お客様に失礼」という源次郎の信念から、大手ガス会社に勤めていた長男・虎男を社主に起用して危機を乗り越えた。

さらにエンジニアだった虎男は、繊維・染色機械を設計、製造、販売。湯上りは浴衣という時代に、小出鉄工所ブランドの機械は順調に売り上げを伸ばした。

次ページへつづく

のNo.1

株式会社小出ロール鐵工所（こいで　てっこうしょ）　代表取締役

小出 明治

こいで　めいじ

研削技術の極限　その上を目指して

機械製作から ロールメンテナンスへ

昭和16年、日本は太平洋戦争に突入、東京大空襲で工場が全焼してしまう。戦後の混乱を乗り越え、昭和23年11月、墨田区石原に3度目の工場を建設し、株式会社小出鉄工所と改組した。

昭和30年代には日米貿易摩擦により繊維産業は大きな打撃を受ける。繊維・染色機械メーカーである同社も苦境に立たされた。糸偏(いとへん)景気は終焉を迎えていた。

この時期入社したのが3代目となる惠勇(けいゆう)である。持ち前の豊富な人脈を駆使して果敢に営業活動を行った惠勇は、製紙加工機械のロールメンテナンスができないかという話を持ちかけられる。紙を伸(の)すのに用いられるロールは汚れたり、摩耗したりする。これを再加工するのである。「繊維機械にもロールは一部品だ。ウチにも無縁の仕事ではない」。惠勇は引き受けた。注文は引きも切らなかった。これを機に、機械製作メーカーからロールメンテナンス会社へ業態転換を遂げたのである。

昭和40年代に入り千葉県東習志野工業団地に移転。世はまさに高度成長期、関東一円のあちこちで製鉄所の建設が始まった。製鉄所はひとつのラインの中でロールの数が多い。これらのメンテナンスを請け負うのに、京浜、京葉、鹿島臨海どこの工業地帯にも便のよいこの立地は打ってつけだった。

設備力、技術力、競争力が付いた同社は、メンテナンスに留まらず新規のロール製作も行うようになっていった。

直系長男・明治、スキーと出会う

昭和44年9月、株式会社小出ロール鐵工所と改称。“鉄”を“鐵”へと替えたのは、2代目・虎男の“金を失わないように”との思惑からだった。

直系長男の孫に明治と名付けたのも虎男である。日本の良き時代、明るく活気ある時代を名前として授けたのは、欧米列強に対して強くあれという願いも込められていた。

細く、小柄で、おとなしく、本ばかり読んでいる明治少年に、虎男はいろいろ語って聞かせた。祖父の家を訪ねると、多くの孫たちの中で自分だけが呼ばれ、祖父の前に正座し、話を聞く。その中には会社の歴史も含まれていた。しんどい時にどうやって乗り越えたか。たまに祖父とふたり食事に出かけると、突然、降りたばかりの電車の車両番号を示して足し算や掛け算をしてみろと言われたりする。今思えば、祖父なりの跡継ぎへの英才教育だったのかもしれない。

そんな虎男の想いをよそに、中・高一貫の男子校に進んだ明治は、家業に対する関心はいっさいなく、工場に足を向けることもなかった。進学校だったが勉強もせず、なにかに熱中するでもない目立たない少年時代を送っていた。

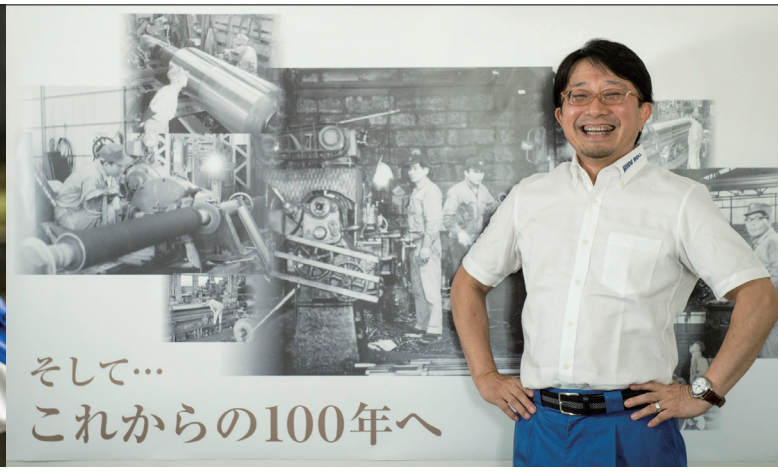
一浪して大学に入った明治に変化が表れた。彼を変えたのはスキーだった。

大学で基礎スキーの同好会に入った明治は目の覚める思いだった。もともと誰かに迷惑をかけるのが嫌いな明治は、自分の失敗が足を引っ張るのではという懸念からチームスポーツに今ひとつ踏み込めなかった。ところが、自分の力で自分が評価されるのがスキーだった。自分が練習する分、自分に返って来る。

間もなく同好会を辞めた明治は、単独で検定に合格。毎年12月中旬～4月までは新潟のスキー学校でインストラクターをして過ごした。そのあとも帰京せず、今度は青森の八甲田で山岳スキーガイドの手伝いをした。スキーと出会い、合宿先でさまざまな人々と寝食をともにする中で、かつての内気だった明治はタフな若者に変わっていた。「初めて人生でこれしかないと思えるものに出会ったのがスキーでした。ひとりなら、これで食っていけるかなあ、なんて」

しかし、そんな暮らしをしていれば大学を留年するのも当然だ。5年生での卒業も迫って、「さすがにこのままではいけない」と考え始める。就職活動もしていなかった。そんな時、「ウチはなんか商売していたなあ」という考えがふとよぎった。

恥を忍んで父に頭を下げた。「家の仕事をするというのも格好が悪いから、どこか同業者を紹介してほしいといいました」。も



ちろん跡を継ごうなどという考えはない。自分は勤め人で、一家団欒で過ごせればよかった。

努力する素直さ

勤め先は大阪の超下町にあった。「まさにザ・オーサカという会社でしたね」。

現場で仕事のイロハを教わった。家業のことは黙っていたので、「大学は卒業してたけど就職に難儀し、千葉からやってきた男」といった扱いで、ずいぶんどやされた。しかし分け隔てないぶん、人の温かみも知った。

バブル期で夜遅くまで機械に向かう毎日。それはミリ単位の削りと研磨の世界にどっぷりと浸かることだった。大学は文系だったから基礎知識があるわけではない。人の倍勉強する必要があった。「しかし、倍の努力をすれば1/2の時間で取得できます。僕は基本的に優秀じゃない。けれど、それを知っている素直さと、だからこそ努力しようとする素直さはあるかもしれない」。

やがて外注係を任されるようになると、「商売人の町・大阪ですからね。金銭に関するシビアさも身を持って学びました」。

３年が過ぎた頃、父から「帰ってこい」と声がかかった。「大阪が楽しかったんで、渋々帰ったんです」。しかし、帰ってからが大変だった。周りは将来の跡取りとして見る。こちらも口先だけは達者になっていたつもりでも、その実、現場の言葉は関西とでは違っていたりする。同世代の若手が受入れようとしてくれないのは肌で感じた。だからひたすら勉強した。ここでも身に備わった素直さが発揮された。

２年後、営業に配属された。すると間もなくバブル崩壊。売り上げはズドンと落ちた。鉄鋼不況も含め社会の構造が変わっていく渦の中で、取引先の新規開拓を余儀なくされた。もはやフツーの勤め人でいいなどという考えは微塵もなかった。自分が仕事を取らねばならない。そうしなければ会社に帰れないと思った。明治は１ヶ月5,000キロ車を走らせた。

そうした中、重電機メーカー、産業機械メーカーといったエネルギー関連企業からOEMでシャフトの機械加工の仕事を得た。「丸ものなのは一緒なんですが、今度は高精度の軸もの加工をするようになりました。そうやって、僕らが生きていく技術を広げたわけです」

新たな分野を切り拓(ひら)いたという自負を胸に、平成18年、明治は社長に就任。
同社が100周年を迎える今年、自分が丁度50歳であることには「運命を感じる」という。またこれを第二創業と捉え、意識を新たにしている。そのひとつが磨きである高精度研磨の仕事に立ち返ることである。シャフトをつくる切削加工を大事にしつつ、本来のロールメンテナンスという研削技術の極北を目指すのだ。そのため大型精密研削盤を導入し、これを〇(ゼロ)号機と名付けた。記念行事も企画している。だが、「全国からお客様を招待するパーティーはキャンセルしました。代わりに僕が全国のお客様のもとに伺い、ご挨拶したいと思います」。一方で中止していた社員旅行を復活させる。社員の家族も一緒に200人近くで震災復興の応援も兼ねて東北を訪ねる。

服装にこだわりを持つ明治は、作業服もカッコいいものにしたかった。袖に付けた日の丸は、「日本の№1は世界の№1」との思いからだ。「社長なんて理解されない存在なんですよ。だから、なんでも言葉にして伝えないと。これまでで僕がいちばん口うるさい社長かも知れません」。そう語る明治は、削って、磨いて、穴を開けて、機械加工の総合メーカーを目指す。

（取材・文＝上野(うえの) 歩(あゆむ)）

Company Profile

エミダス会員番号：87860

◆会 社 名　株式会社小出ロール鐵工所
◆所 在 地　〒275-0001 習志野市東習志野 6-21-8
◆ TEL ／ FAX TEL：047-475-3811
FAX：047-475-2422
◆創　　業　1914 年
◆従業員数　104 人

◆主要三品目
・製鉄用各種鍛鋼焼入ロール製作及び研削加工
・製紙用各種ロール製作及び研削加工
・ポンプ軸・タービン軸・印刷機械用各種ロール製作及び研削加工・ビニール・製粉用各種ロール研削加工

◆お問合せ　担当：中野 秀樹